

『渋谷・実践・常磐松』を刊行して - II ~ 学園の地、渋谷・常磐松地域を探る ~

井上 一雄

はじめに

6月下旬に発行された『ニューズレター No.9』に寄稿した「実践女子学園再認識の記」に続き、その後編として、今回は、「学園の地、渋谷・常磐松地域を探る」と銘打って、学園が存在する常磐松地域を中心に、渋谷を地理的、歴史的に読み解いてみたい。↗

学園に在籍し、8年間を常磐松の地に過ごした私の思いの中に、“学園の歴史を知るということは、同時に学園が存在している地域の歴史やその地理的、社会的特徴を知ることでもある”という思いがある。そうした考えから、今年、創立から118周年、渋谷移転から114周年を迎えている実践女子学園の地、常磐松地域と学園と地域との関わりについて探ることとする。

武蔵野台地の辺縁にあたる東渋谷台地（淀橋台）上にある実践女子学園

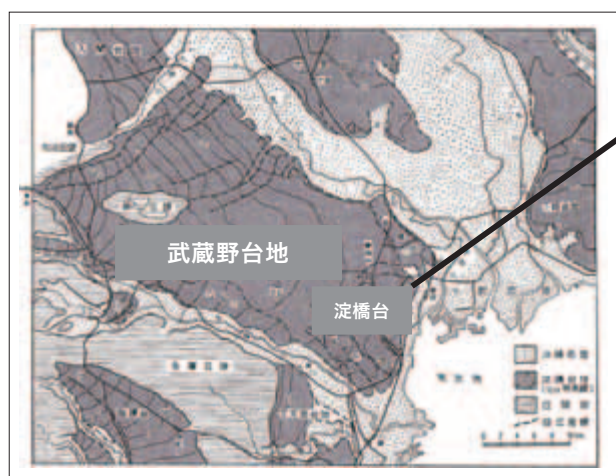
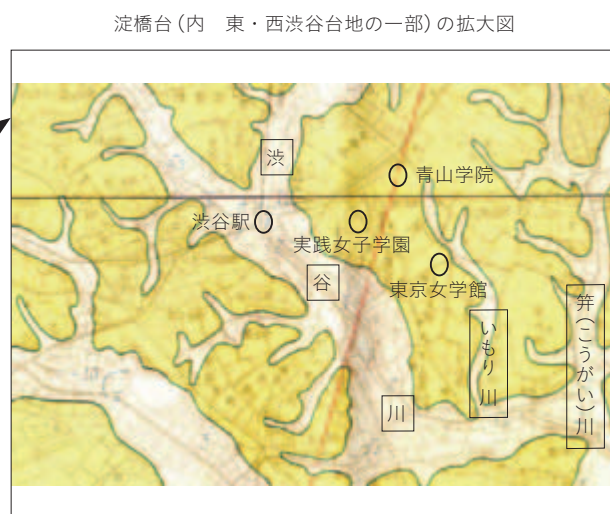


図1 「東京地盤図」(東京地盤調査研究会 1959年)



淀橋台(内 東・西渋谷台地の一部)の拡大図

図2 「東京地盤図」付図1「東京地質図1961」

渋谷区の地形は俗に一川五台地二十谷といわれる。その様子は、東京都の地盤を広域に示した図1の「東京地盤図」で東京都と神奈川、埼玉両県に挟まれた武蔵野台地の広がりを見、図2によって、渋谷駅周辺の武蔵野台地の辺縁にあたる淀橋台の一部の様子を見ることによって確認できる⁽¹⁾。

すなわち、渋谷区の地形は、渋谷川を中心に渋谷川とその支流を挟んだ淀橋台をさらに細分化して東に東渋谷丘陵(台地)、西に西渋谷丘陵(台地)、渋谷駅の北に代々木丘陵(台地)、北西に幡ヶ谷丘陵(台地)、北東にある千駄ヶ谷丘陵(台地)からなる。↗

さらにその丘陵(台地)の崖に大小20位の小さな流れが谷状に形成されている。今では暗渠になっており、川の流れは確認できないが、いもり川、筈(こうがい)川などは、谷地形に沿って湧水が流れていた。

実践女子学園は、注意して歩けば確認できるが八幡通りから西門に至る歩道は、緩やかな勾配があり、台地の上に建設されていることがわかる。学園は安定した地盤の上に揺るぎなく存在している。

(1) 武蔵野台地の東端部の標高は20m前後、新宿付近で40m、吉祥寺で60m、西端の青梅付近で190mに達している。また、台地はひと続きではなく渋谷を含めた皇居、新宿、松原、駒場、品川地域からなる三角形の淀橋台、その西南の荏原台、北部に隣接する豊島台、上野付近の本郷台、立川地域の立川台、そして狭山丘陵からなる。

実践女子学園周辺は縄文人の生活の場だった

ところで、こうした地形上の特徴を持ったこの地は、どのような歴史的経過を辿り現在まで続いているのだろうか。

この点で示唆的な文献に『常磐松小学校創立50周年記念誌』がある。常磐松小学校は、前回の『ニューズレター』でも紹介したが、実践女子学園中学校高等学校に隣接されている大正14年12月創立の小学校である。この小学校の50周年記念式典(1975.11.1)で、当時國學院大學教授だった樋口清之氏(1909 - 1997)が行った記念講演が、この『50周年記念誌』に収められている。

氏はその中で次のように語っている。

「・・・この学校(常磐松小学校)を建てるときに貝塚が出たからです。世にこれを常磐松貝塚と呼んでいますが、アメリカのミシガン大学で調べてもらったところ、今から約2,700～2,800年から3,000年くらい

前にここに貝塚があり、この門の付近が海の波打ち際だったということが証明されたのです。その高さが今言った26～27mなのです。従って、常磐松小学校のある位置が日本石器時代の東京湾の最後の波打ち際で、その位置にこの学校があるのです。」

『東京の貝塚を考える』(品川区立品川歴史館 編集、坂詰 秀一 監修、雄山閣、2008年)によれば、渋谷区内の貝塚は恵比寿の豊沢貝塚、広尾の羽沢貝塚、代々木の明治神宮北池貝塚が公表されているが、この講演内容の表現から推測して、常磐松地域に貝塚があり、この地域で縄文人が生活していたことが窺い知れることになる。それにしても、実践女子学園の目と鼻の先に「日本石器時代の東京湾の最後の波打ち際」があったとは、現在の様子から考えて、想像することもできないことである。

また、1952年編纂されている『渋谷区史』に「常磐松実践女子大学下の竪穴は、深さ地表より約80糎(センチメートル)を算し、その底より打製石斧が出土し、



図3 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	概要	時代
1	羽沢貝塚		地点貝塚	縄中
2	青山学院構内	渋谷四丁目青山学院構内	包蔵地 屋敷	縄 近
3	渋谷城(金丸城)跡	渋谷三丁目金丸八幡神社	城館	中
4	河崎庄司郎(妹尾氏)館跡	渋谷三丁目金丸八幡西	城跡	不明
5	—	東一丁目実践女子学園	集落	縄中
6	—	東四丁目	貝塚?	縄後
7	—	東四丁目國學院大學	包蔵地	縄中
8	—	東四丁目氷川神社	包蔵地	縄中
9	—	東四丁目広尾小学校	集落	縄中 弥
10	—	東四丁目常陸宮邸	横穴墓	古
11	—	渋谷三丁目 東一丁目	横穴墓	古
12	—	渋谷二丁目	横穴墓	古
13	—	渋谷一丁目	横穴墓	古

出典：『東京都渋谷区羽沢貝塚』～日本赤十字社医療センター建替え工事に伴う事前調査～

又付近には2,3同様の竪穴があった。」という記述がある。1998年作成の『渋谷区遺跡分布地図』によれば、渋谷区にある埋蔵文化財は計77ヶ所にのぼっており、実践女子学園近隣にも下図のNo.5～8に当たる箇所を確認できる。遺跡の内容も表の通りだが、これによると八幡通りから西門に至る通学路の左手一角辺りに縄文中期の集落跡(図中No.5)が確認されている。その他國學院大學の若木タワー、3号館(メモリアルレストラン等がある建物)の敷地に縄文時代中期の包蔵地⁽²⁾(同No.7)が発掘されている。また、東4丁目の常陸宮邸には横穴墓(古代)の遺跡(同No.10)、青山学院構内では、縄文時代の包蔵地と近世の屋敷跡の遺跡(同No.2)確認がなされている。その他、左表にあるように金丸八幡神社(同No.3)、氷川神社(同No.8)にもこうした埋蔵文化財として列挙される遺跡・文化財の発掘が行われているのである。

(2) 埋蔵文化財を包蔵する土地として周知されている土地をいう(文化財保護法第93条第1項)。

「大正8-11年青山・渋谷住宅地図」からみる 常盤松地域の学校群

さて、ここで時代を少し経過させ、明治後期と大正後期の常盤松地域の特徴を見てみよう。

学園が存在する常盤松地域は、現在でも文教地区として紹介されているが、1909(明治42)年の東京南部1万分の1地形図には、この“常盤松”地域に「実践女学校」、「青山學院」「高等農学校」の表記を見ることができる。この「高等農学校」というのは、1898(明治31)年に当時の常盤松(現渋谷区渋谷4丁目)に移転し、1901(明治34)年に大日本農会付属私立東京高等農学校と称していた現在の東京農業大学のことである。今更ながら、これらの地域や学校の表記に時代と歴史の変遷を感じることができる。

因みにこの地域が常盤松町と表記されていたのは、1928(昭和3)年の地名変更時から1966(昭和41)年までの町名変更時までで、それ以前は渋谷町下渋谷字常盤松、伊勢山とされていた。

次に下図の「大正8-11年青山・渋谷住宅地図」を見てみよう。



図4 大正8-11年 青山・渋谷住宅地図

この地図から読み取れることは、実践女学校の渋谷移転の経緯、1908(明治41)年から1944(昭和19)年まで存在した実践女学校附属幼稚園(のちに実践幼稚園)の建設場所等である。

すなわち、実践女学校(1903(明治36)年に渋谷移転)は、明治政府が荒廃した武家屋敷跡地に設定した開拓使用地を御料地化して造られた第三御料地に建設されたこと、幼稚園は、現在の渋谷区立渋谷図書館辺りに存在していたことが分かる。

私が実践女子学園中学校高等学校に在籍していた時、教職員の多くが、かつての幼稚園が何処に存在していたかについてよくわかっていなかったということも意外なことだった。

さらに、この地図をよく見ると、幼稚園の東南隣りに「常盤松女学校」もあったことが分かる。この常盤松女学校は、1916(大正5)年に設立され、1945(昭和20)年に戦災で焼失するまで、この地に存在した現在の学校法人トキワ松学園(現住所：目黒区碑文谷)の前身であるが、こうした学校の沿革を学校関係者以外で知る人は少ないのではないかな。もちろん、法人名や学校名にその名を残しているのは、かつて

この地に学校が存在していたことの由縁である。また、1923(大正12)年に渋谷に移転した國學院大學の名称は、当然ながらこの地図では確認できず、陸軍演習地の表記がなされている。

千両に値すると言われた銘木の名から発した地名「常盤松」は、地名としてその表記を常盤松に変え、その時代の学校名となり、現在もこの地域のマンション等の建物名や小学校の名称として、『新編武蔵野国風土記稿』に記されてから大凡190年の時を刻んでいるのである。

(いのうえかずお 実践女子学園中学校高等学校元教諭、現 横浜富士見丘学園中等教育学校教諭)

下田先生に関連する石碑等 (1) 瓜生岩子と下田歌子

奥島 尚樹

「嗚呼 刀自は菩薩の化身なりき…」という下田先生がお書きになられた碑文が、浅草寺にある。瓜生岩子刀自の銅像の台座正面に刻まれた撰文がそれである。

瓜生岩子刀自の銅像は、雷門から宝蔵門を通り本堂前を左に曲がった奥にある「新奥山」にあり、薬師堂の向かい側に静かに鎮座されている。なお、この銅像は戦争中の金属類回収令（金属供出）を免れた、明治の建立以来のものである。



図1：瓜生岩子刀自銅像
(浅草寺 新奥山)

瓜生岩子刀自は、現在の福島県喜多方市に生まれた。日本の社会福祉事業活動の草分け的存在であり、戊辰戦争では戦場での敵味方ない救護活動に従事し、日本のナイチンゲールと称されることもある。また、日清戦争、日露戦争においては、様々な形で後方支援活動に励み、戦争において父親を亡くした家庭の支援や貧困者・孤児の救済に尽力した。

明治29(1896)年には藍綬褒章を女性として初めて受章する。明治30(1897)年福島で過労のため病臥、福島瓜生会事務所にて死去した。

瓜生岩子(文政12(1829)年2月15日 - 明治30(1897)年4月19日)

瓜生岩子刀自と下田先生が直接お会いになられた、あるいは支援を具体的にしていた、といった直接的な関係については、様々調査しているが根拠となる資料は発見できていない。ただし、銅像の台座に撰文を書くこととなる関係に関しては、その文章

の内容からして下田先生が刀自の活動を良く御存知であったことが推察でき、また下田先生の社会事業・福祉事業に関する活動に深く影響を与えていたのであることは、推測に難くない。

瓜生岩子刀自の活動を支援すべく、上流夫人たちが声を掛け合い「瓜生会」が発足し、バザーなど様々な慈善活動が行われたとの記録がある。

実践女子大学図書館には、岩佐徳子女史による瓜生会創設に関する趣意書の下書きが保存されており、下田先生のお名前は直接記載されていないが、おそらく岩佐女史と下田先生とはご相談されていたものと思われる。

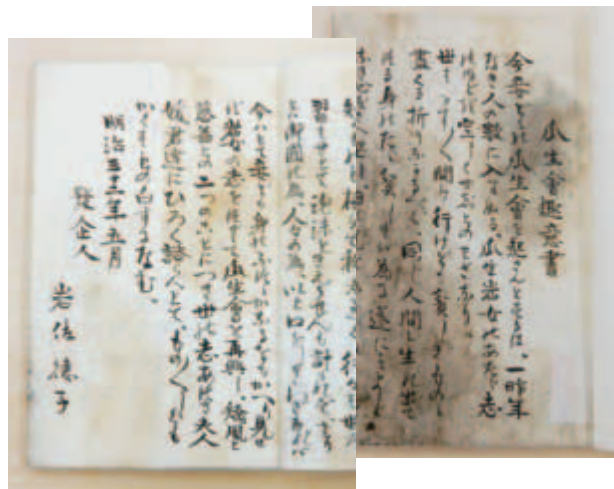


図2：瓜生会趣意書
(筆：岩佐徳子 実践女子大学図書館所蔵)

下田先生の慈善活動・社会活動・福祉活動というと、どうしても具体的に分かっている関東大震災時の支援活動ということになるが、実際にはそれ以外にも様々な活動を実施している。実践女子大学図書館が所蔵する写真の中には、日露戦争や第一次世界大戦に従軍する日本の将兵に向けた慰問袋を、大量に取り扱っている写真がある。また、下田先生がお名前を連ねたことのある各種団体においては、様々な支援活動もされていたことと思われるし、そ

うあって欲しいとも願うところである。貧困に関して言えば、「ご自身の小さい頃の状況はお忘れにならないことではない」(『下田歌子先生傳』)ということでもあり、ご自身が最後まで支援することができるのであれば、積極的に手を差し伸べられたことは容易に想像できる。

台座に記載されている撰文の翻刻は以下の通りである。さすがに、台座に彫られている文字は歳月が経っていることと、やや読みづらい文字で書かれているため、読むことはできなかった。調べたところ、『南無観世音 金龍山縁起正傳』という本があり、金龍山(浅草寺の山号)内にある、仏像、石碑等について正傳を残そうという当時のご住職により作成されたもので、瓜生岩子刀自の撰文についても翻刻・ふりがなをつけたものが記載されていたことから、読みやすく打ち直したものを次に示した。

同					同		同		委員		委員		台座左	
其浦清次郎					後藤新平		三島彌太郎		吉井幸藏		伯爵		男爵	
													渡澤榮一	
													吉井静子	
													三島和歌子	
													岩佐徳子	
													後藤和子	
													河野蘭子	
													原禮子	
										發起人		台座右		
										伯爵夫人		土方龜子		
												板垣絹子		

図4：台座右左刻印氏名一覧



図5：『南無観世音 金龍山縁起正傳』抜粋

瓜生岩子銅像 (浅草寺 新興山 淡島堂後方)

下田歌子撰文 (台座正面)

あ・とじ ぼきつ けしん ととじあひつ ひゅう
 嗚呼刀自は善願の化身なりき刀自会津の遊色に生まれて身は寡婦となれり
 其功績の偉大なる故に遠あらず學校を建てて佛教を弘め願望の
 風を一掃し育兒會を興し病院を設けて幾多の窮民を救ひ或は兵
 士を恤み戦死者の遺族を慰め或は廢物利用の法を工夫して世を益するな
 ど刀自の一生涯は殆ど福徳の業に盡し終りぬれば官よりも尊
 貴せられ殊に勲定の監校褒章を賜はれり明治三十年四月 齡六十九
 にて逝きぬ然れども其善行美蹟は茲に不朽の記念碑たらむ

正五位 下田歌子 撰
 土肥直康 書

図3：瓜生岩子銅像台座正面(下田歌子撰文)

台座右側には、銅像設置に関して発起人となった女性達の名前が、台座左側には、実行委員会の委員名が彫られており、当時の錚々たる顔ぶれが名を連ねている。

最近はボランティアという言葉が軽んじて使用されているように感じる。場合によっては有償ボランティアという言葉も使われることがあり、交通費や食事、果ては謝礼まで出ることもあるようである。また、ボランティア活動への参加を単位化するよう文部科学省が奨励したことから、ボランティアへの参加に「単位がもらえるので参加した」ということを、対象とする方々に公言して憚らない学生もいるとのことを聞き、残念に思う。本学の学生ではないが、そのような大学生がいることは衝撃である。単位化の是非については問うつもりはないが、ボランティアに参加する本学の学生には、ボランティアという社会と接点をもつ学習の場に、大学の代表として参加している自覚をしっかりと持つことを望みたい。

下田先生の傳記や著書から推察するに、安易なヒューマニズムによる活動ではなく、しっかりと覚悟を決めた社会福祉事業・慈善事業を実施されたことと思うので、実践女子学園の学生・生徒は、当

初は興味から始めたボランティアであっても、一度始めたのであれば自身で目標を定め、精一杯、甘えない、馴れ合わないよう活動してもらえればと思う。

瓜生岩子刀自との関係は現時点で不明な事が多く、また下田先生の社会事業への参画については戦災で多くの資料が失われており不明な点が多い。興味深い

情報は早めに多くの方に公開し共有することで、下田先生に関連する資料や情報等を多く発見することができれば幸いと思い、今回の文章を作成した。

福島にある瓜生岩子刀自の銅像に関しては興味があったので、全6箇所に出向き写真を撮影して来た。以下の通りである。



図 6：示現寺(喜多方市 菩提寺)



図 7：瓜生岩子生誕の地(喜多方市 佐牟乃神社)



図 8：瓜生岩子記念館(喜多方蔵の里(道の駅喜多の郷))



図 9：長楽寺(福島市)

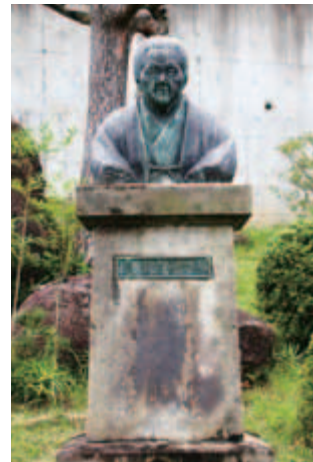


図 10：福島愛育園(福島市)



図 11：福島愛育園
あすなる保育園(福島市)

【参考資料】

- ・『瓜生岩子 全』(傳記叢書16)奥寺龍溪著 昭和62年(明治44年の複製)
- ・『菩薩行路 瓜生岩子伝』佐藤民實著 昭和19年
- ・『南無観世音 金龍山縁起正傳』金龍山縁起編集会編 明治45年
- ・『下田歌子先生傳』故下田校長先生傳記編集所 昭和18年

(おくしま なおき 香雪記念資料館 事務室部長)

平成29年度 下田歌子研究所活動報告

下田歌子研究所 事務室

本研究所は、下田歌子の建学の精神をふまえ、現在・未来において女性たちがよりいきいきと活躍できる社会の構築を目指し、それに資する施策・思想を広く社会に発信していくことを事業の柱としています。平成29年度の活動の一部をご紹介します。

講演会及び展示の開催

講演会や展示を開催し、下田歌子先生の活動や学園の歴史など積極的な発信・提言を行っています。

講演会

常磐祭の一環として、愛甲晴美客員研究員による講演会を開催しました。下田先生の日記から、身近なことだけでなく、教育者としての仕事ぶりや生徒達への想いが伝わる内容の講演を実施いたしました。参加された方からは、下田先生の教育熱心な人柄や女子教育に対する想いだけでなく、人物像や今まで公表されていなかったことまで聞くことができたなど、たくさんのご感想をいただきました。

「下田歌子自筆日記について－明治23年を中心に－」

【講師】愛甲 晴美 氏 (実践女子大学下田歌子研究所 客員研究員)

【日時】10月15日(日)

①11:00～12:00

②15:00～16:00

【場所】渋谷キャンパス6階
603教室



講演会の様子

展示

今年度は、下田先生の教育者としての「始まり」や「想い」をテーマに実施。常磐祭(学園祭)では、ご寄贈いただきました卒業アルバムや下田先生の着物を展示し、皆様には、学園の歴史だけでなく下田先生の想いにもふれていただくことができました。

◆被服科会総会にて 特別展示を実施

【日時】4月16日(日)

【場所】日野キャンパス
桜ホール



被服科会の展示

◆常磐祭特別展示

【日時】10月14日(土)、15日(日) 10:00～16:00
(渋谷キャンパス常磐祭)

11月11日(土)、12日(日) 10:00～16:00
(日野キャンパス常磐祭)



渋谷キャンパス常磐祭



日野キャンパス常磐祭

◆下田歌子賞表彰式

下田歌子の業績を顕彰しつつ、エッセイや短歌を募集する下田歌子賞の表彰式が岐阜県恵那市岩村町で行われました。今年は、開催15年目を記念し様々なイベントが開催され、下田歌子研究所も特別展示を実施しました。

【日時】12月16日(土)

【場所】岐阜県恵那市岩村コミュニティセンター



下田歌子賞表彰式



下田歌子賞特別展示

研究会を実施

第1回研究会

新潟市歴史博物館、北方文化博物館、新潟青陵学園、新潟女子工芸学校跡地 訪問

【日時】8月20日(日)、21日(月)

研究所では、研究員を中心に研究会を定期的に開催しています。

下田先生の思想や事績等を研究するため、先生が教育活動を行った場所を訪れ、関係資料の掘り起こしや実地

調査を行い、関係機関との連携を図っています。

今年の研究会は、その足跡をたどり実践桜会新潟支部の皆様のご案内で、新潟市歴史博物館や北方文化博物館、新潟青陵学園を訪問しました。下田先生は、1900(明治



新潟市歴史博物館

33)年、帝国婦人協会新潟支会の事業として「裁縫伝習所(私立新潟女子工芸学校)」を勝間田千代子、千頭トクラと共に設立しました。この学校は、実学教育を目指し、新潟県内の女子教育の中心となりました。1965(昭和40)年に名称を新潟青陵学園に改め、現在は男女共学の学園となっています。新潟市歴史博物館では新潟の女学校と女学生の歴史について展示を閲覧し、京都大学小山静子教授による「男女別学の時代」特別講演で、明治から昭和初期にかけての教育制度や



北方文化博物館にて



新潟女子工芸学校跡地

自校教育

新人職員及び食生活科学科の
新入生を対象に自校教育を実施。

「下田歌子に学ぶ」

【講師】湯浅茂雄(下田歌子研究所長)

【日時】

3月28日(火)新人職員対象

4月27日(木)生活科学部食生活科学科新入生対象



新人職員研修

出版事業

現在、絶版になっている下田歌子の著作のうち、特に現代社会・現代女子教育研究に資すると思われるものを『新編下田歌子著作集』として著作の復刊をしています。今年度は、『女子の心得』を3月に出版予定です。



『女子のつとめ』『婦人常識訓』

当時の女学生の様子について拝聴することができました。新潟支部の皆様との交流も行い、下田先生の子教育に対する想いや生徒達への想いにたくさん触れる貴重な機会となりました。

研究会でお世話になりました実践桜会新潟支部長寺澤昭子様が9月、天国に旅立たれました。下田先生への想いや実践女子学園の卒業生としての誇り…。

この研究会を通して、たくさんの方を寺澤様より学ばせていただきました。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。



実践桜会新潟支部の皆様と
(前列中央 寺澤様)

資料収集(寄贈資料の紹介)

下田歌子研究所では、未だ明らかになっていない学園や下田先生の事績がわかる資料収集に力をいれております。今年度も以下の資料をご寄贈いただきました。

資料形態	資料、書名(題名、内容)	資料形態	資料、書名(題名、内容)
着物	下田歌子着物 2点 (家紋入り)	卒業証書	卒業証書 (実践女子専門学校)
写真	下田歌子洋装の写真 1枚	免許状	教員免許状
写真	下田歌子肖像写真 1枚	免許状	中学校教諭 二級普通免許状
写真	下田歌子 喜寿のお祝い写真 1枚	免許状	高等学校教諭 二級普通免許状
写真	下田歌子校長室での写真 1枚	卒業 アルバム	1935 実践高等女学校
写真	下田歌子葬儀の写真 1枚	写真	卒業生写真 15枚 同窓会
卒業証書	卒業証書 (青山尋常小学校)	校章	実践女子学園 3点
卒業証書	卒業証書 (実践高等女学校)	カレッジ リング	実践女子大学
名刺	下田歌子名刺 1枚	図書、原稿	荒波正隆著『征路日誌』原稿 (冊子2冊、原稿79枚)
書簡	本居宣長、小西春重(春村) 書簡2巻	絵葉書、カード	絵葉書2通、カード他2枚

(文責：竹田真由子)

寄贈資料紹介 - 下田歌子先生の着物 -

下田歌子先生が生前着用していた着物を2017(平成29)年8月12日、下田歌子研究所に2点ご寄贈いただきました。宮中に参内する際にお召しになったものと言われています。

形見として大切に所蔵されていたのは、久志目れん氏。今年の2月に100歳でお亡くなりになりました。久志目氏は、地元磐田市の高等女学校在学中の1932(昭和7)年から下田先生が亡くなる1936(昭和11)年頃まで、下田家で来客の対応からお薬の管理まで、身の回りのことをして、お仕えされていました。また、久志目氏は生前に下田家での仕事や出来事、下田先生の教えなどをよくご家族にお話されていたそうです。晩年に使われていた久志目氏の手帳には、「先生は今どこにおいででしょうか。下田先生のおそばに行きたい、先生にもう一度お会いしたいです。呼びにきてください」とお慕いする気持ちが書かれていました。私達は久志目氏の下田先生への想いと、先生が久志目氏を想う気持ちをお着物と一緒にいただくことができました。

寄贈者：大畑 とも子様、久志目 栄司様、藤田 富美子様、間瀬 壽子様、
中谷 春江様、高野内 金栄様
寄贈日：平成29年8月12日



『ニューズレター』No.10

発行：2018年1月31日 編集・発行所：実践女子大学 下田歌子研究所

〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1 電話・FAX：042-585-8945 E-mail：shimoda-ins@jissen.ac.jp

印刷：日野テクニカルサービス株式会社